

— 本を大切に —

渡邊 幸弘（総合閲覧課）

利用者の皆さんは日頃から図書館の資料を閲覧・複写し、あるいは借りて研究や学習等に活用されていることと思います。皆さんの手元にあるとき、本は個人の持ち物のように感じられることもあるでしょう。しかし図書館で所蔵している資料は、本当は一人のものではなく、図書館を訪れる人々皆の共有財産なのです。ところが最近、貸出中の資料の紛失、あるいは破損・汚損が頻繁にあり、中央図書館だけでも年間で300件を超える届け出があります。

中央図書館をはじめとして多くの図書館・図書室で所蔵している資料が借りられるなど、利用者の利便性は高まっていますが、反面、借りている資料が共有財産であるという意識は低下しているように思われます。資料自体の経年劣化もありますし、利用されてこそ意味がありますので、通常の利用による軽度の破損はある程度やむを得ないことですが、不注意によって資料が利用できなくなる場合が多いのは残念なことです。

理由を伺うと、紛失については、図書館内や学内、また電車内や移動先での置き忘れが多く、中には自宅で紛失した例もあります。また、書き込みや線引きなどのほかに、最近多く目にするようになったのが不注意による汚損です。雨の日に蓋の閉まらない袋に入れて図書を濡らしたり、飲食物の付着、小動物（犬や猫、ねずみ類）の噛み痕、ひどい場合は衣類とともに洗濯してしまったというような事例もあります。さすがに図書を洗濯してしまった学生は申し訳なさそうにしましたが、汚損しているにもかかわらず平然と返却カウンターに持って来る利用者がいるのも事実です。

紛失の場合も破損・汚損の場合も、原則的には現物弁償をしていただいています。とはいえ借りた図書を利用できないようにしたから買い換えれば良いというものではないと思います。中にはその資料をどうしても使いたいと予約をする利用者もいます。しかし、一人の不注意が、後の利用を不可能にしてしまうこともあるのです。

補修や再製本、買い替えなど資料の保全には図書館も努力してまいります。利用者のみなさんに

も冒頭でも触れましたように、図書館の所蔵資料がすべての利用者（現在も、そして将来も）の共有財産であることを意識しながらご利用をくださるようお願いいたします。（2008.9.25記）



右：誤って洗濯されてしまった文庫本。補強用のブックカバー（ビニール）により、表紙・裏表紙だけ残り、中身は溶け固まった状態。

左：食べこぼしと思われるシミがあり、本の中にも浸透している。さらに表面にカビが発生している。